

# 歩行補助具は歩き続けるための味方



左が「手つえ」、右が「足つえ」、左が「ローラー」、右が「杖」、左が「四脚」、右が「三脚」

歩くことが難しかった人が歩けるようになると、QOL（生活の質）が大きく向上します。人間は、外出時はもちろん、家の中でも、部屋の中を移動したり、玄関で靴を脱いだり、ちょっとしたつかまり立ちの折も、脚の筋肉を使い、歩いているからです。

歩行補助具は歩くことが難しい人のQOLを大きく高めます。歩行補助具は大別すると「つえ」と「歩行器」「歩行車」の三つになります。

「つえ」は、歩行補助つえともい、T字の形をした一本の脚と一つの握りからなる

T字つえ、松の葉のような形

をした松葉つえ、接地部分が枝分かれしている多脚つえ、前腕と握り手で体を支える

「ローラー」などがあります。

また、歩行器に似た「歩行

器具」などがあります。

歩行器は、体を囲む4脚の

## 生活が前向き、快活になる



て行えるようになりました。

家の中の移動はトレー付きの歩行車を使うことで、食事の

歩行車を使つことで、食事の

皿や茶わんを運ぶのに転倒や

つまずきを防ぎながら行える

ようになりました。

令和元年版の高齢社会白書

によると、全人口に占める65歳以上の高齢者の割合は28.1%となり、要支援・要介護を認定された人も600万人を超えています。それに伴

い、歩行補助具の利用は年々

増えていました。

今や歩行補助具などの福祉

用具は、それに「頼る」もの

ではなく、積極的に「使える

ものは使う」ものに変わつて

きました。それによって、快

活に前向きに生活できると毎

日が充実します。

高齢を「幸齢」とするため

に、歩行補助具はその要素

の一つになっています。

病気や、加齢に伴う筋力の低下は、歩くことを困難にさせてしまう場合があります。そんなとき、強い味方になるのが、つえや歩行器など

の「歩行補助具」。歩行補助具の種類や使い方などについて、一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会の岩元文雄理事長に聞きました。

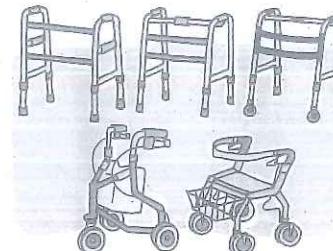
全国福祉用具専門相談員協会



(写真は本人提供)

**岩元 文雄 理事長**

フレームを持つ歩行補助具です。両手で歩行器を持ち上げ、前方に運んで進む固定式のもの、左右の脚を交互に前に振り出しながら進む交互式があります。



さらに、二輪、三輪、四輪と歩行器に車輪が付いた歩行車もあります。これほど多くの種類に分かれているのが歩行補助具なのです。それは、歩くことが必要としている人の体の状態や、使用する環境がさまざまです。体に合つた、つえの長さや歩行器の高さを選ぶ必要があるからなのです。

歩行補助具を必要としている専門性向上と社会的地位の確保を目指した職能団体として、2007年に設立されました。2000年にスタートした介護保険では、福祉用具に関する業務を扱う職種として、福祉用具のレンタルや販売を行う事業所ごとに専門相談員を2人以上配置することが義務付けられています。

専門相談員は、福祉用具の利用者が自立した生活を目指せるように「福祉用具サービス計画書」を作成します。具体的には、利用者本人や家族から、生活の中で困っていることや、1人で歩きたくない、外出したいなど、実現させたい生活の内容を聞き、利用者に適した歩行補助具などの選定した福祉用具の機種や、その理由を計画書に記します。

歩行補助具一つを取つてみても、歩行車の車輪の大きさが小さいものは室内で使えますが、屋外では凹凸にはまり

た場合、利用者の状況を確認するために、専門相談員が定期訪問を行います。例えば、歩行補助具はレンタルや購入を行えば、それで終わりではなく、状態が悪化してしまって生活を充実させるのは利用者本人です。周囲が介護しやすいからという観点だけで選ばないことが大切です。

これらの歩行補助具を使って生活を充実させるのは利用者本人です。周囲が介護しやすいからという観点だけでは、歩行補助具を使つて生活を充実させる危険があります。ある程度の凹凸なら車輪が大きい歩行車がよいでしょう。



## 利用者一人一人に適した選定を

です。また、歩行車は操作に慣れる必要があります。下肢の緊張が高まる人の場合は、使用の前後に体のストレッチを行ふとよいでしょう。